漢字の接辞的用法に関する一考察（2）

——「化」の品詞転換機能について——

加　納　千恵子

1. はじめに

前稿「漢字の接辞的用法に関する一考察——形容的意味を持つ漢字の接辞的用法について——」では，漢字の持つ造語力，またその適用のルールといったものの実態を日本語教育の立場から記述，検討することを提案し，形容詞的意味をもつ一部の漢字の接辞的用法に焦点を絞って考察した。漢字の接辞的用法というのは，その機能から，1)語基に意味を添加するだけのものと，2)意味の添加と同時に，語基のもつ文法的性格（品詞）を変えるもの，という2つに分けられるが，前稿で扱ったものはほとんどが1)に属するものであった。

本稿では，2)の品詞転換機能をもつ漢字の接辞的用法に焦点を絞り，その造語力と適用のルールなどについて，日本語教育の立場から考察したい。品詞転換の機能について考察する際には，前稿で規定したとおり，品詞として以下の5分類を考えることにする。(1)

	1)～ガ/ヲ	2)～ノN	3)～N	4)～ナN	5)～スル	6)～Pred
1. N	＋	＋	＋	－	－	－
2. N'	－	－	＋	－	－	－
3. AJN	＋－	＋－	＋	＋	－	－
4. VN	＋	＋	＋	－	＋	－
5. ADN	＋－	＋	＋－	－	－	＋

そして，「N」以外の語基に，接辞的に使われる漢字が付いて「N」になる場合，このような漢字の接辞的用法のもつ働きを「N化機能」と呼ぶことにする。また同様に，語基に接辞的に使われる漢字が付いて「AJN」，「VN」，

「ADN」などになる場合の機能を，それぞれ「AJN化」「VN化」「ADN化」と呼ぶ。

本稿では，その中からN化機能をもつ漢字の接辞的用法とVN化機能をもつ漢字の接辞的用法を取り上げ，その造語力，用法上の制約などに関する記述を試み，特に造語力の大きいとされる「化」の品詞転換機能について，主に三字漢語にみられる接辞的用法に限って考察する。野村雅昭（1974）によれば，新聞語彙調査の結果[2]，4単位以上の語の多くは2単位語と3単位語との結合からなっており，しかもそのほとんどが漢語（字音語）であるという。したがって，複次結合語の構成要素となっている三字漢語に見られる接辞的用法に着目するが，その造語力，造語ルールを明らかにするために，二字漢語における用法も適宜参考にすることにしたい。三字漢語の構造のうち，漢字が二字漢語の前につく＜●＋(○＋○)＞のような型を接頭辞的用法，後ろにつく＜(○＋○)＋●＞のような型を接尾辞的用法と呼び，考察の対象とする[3]。

2. N化機能をもつ漢字の接辞的用法

品詞転換の機能をもつ接辞的用法は，接頭辞より接尾辞に多いといわれる。水野義道（1987）は，体言化機能をもつ接頭辞として「諸・全」，接尾辞としては次のような多くの例をあげている。

改正案・事務員・家政科・専門家・営業課・産業界・商店街・生物学
体育館・危機感・人生観・検察官・輸送機・入学金・太郎君・政府軍
首都圏・特急券・流行語・印刷工・中立国・代表作・解決策・建築士
山田太郎氏・音楽史・理容師・週刊誌・異端児・相談室・合格者・出版社
交換手・写真集・帝国主義・案内所・後遺症・招待状・駐車場・知識人
保証人・小学生・可能性・捜索隊・調査団・委員長・販売店・主流派
豪華版・交通費・食料品・看護婦・人事部・栄養分・治療法・手数料
原則論

上の例のうち，「太郎君」，「山田太郎氏」のように結合する語基がNに限られるものやほとんどの語基がNであるようなもの（「産業界」「商店街」「専門家」など）は，本稿の考察の対象，品詞転換機能をもつ接辞的用法から外して考える。ただし，「特急券」の「券」は「入場券」「招待券」「応募券」など，「交通

費」の「費」は「建設費」「渡航費」「交際費」などのように，VNの語基についてNになることが多いので，考察の対象とする。帝国主義のような2字のものは今回は外して考え[5]，N以外の語基が結合の結果Nになるものとしていくつかの例を加えて，以下のように分類してみる。

結合の型	例	結合語の意味
1. ＜VN＋●＞	①改正案・解決策・輸送機 入学金・招待状・治療法 入場券・建設費・配達料 行動力・慰霊祭・睡眠薬	VNスルタメノ●＝手段 （●デ／ニヨッテVNスル）
	②営業課・相談室・出版社 案内所・駐車場・販売店 永住地・停止線・合意点 観覧席	VNスル●＝所 （●デ／ニVNスル）
	③印刷工・交換手・保証人 捜索隊・調査団・看護婦 建築士・合格者・製造業 裁判官・作業員・演出家	VNスル●＝人／人々 （●ガVNスル）
	④招待客・輸入品・印刷物 使用量	VNサレル●＝人／物 （●ヲVNスル）
	⑤流行語・中立国・代表作	VNシテイル●＝物 （●ガVNシテイル）
	⑥成功率・回転式	VNスル●
2. ＜AJN＋●＞	異端児・主流派・豪華版 悲壮感	AJNナ●

3. ＜その他＋●＞：生産性・可能性・合理性・将来性・人間性
VN　AJN　N'　ADN　N
管理面・安全面・国際面・物質面
VN　AJN　N'　N
安定度・精密度・芸術度
VN　AJN　N
作業用・家庭用
VN　N

上記の接尾辞的用法のうち，1. の語基がVNのものを，その結合語の意味構造から①～⑥に分類してみると，⑥を除く類の意味はかなりはっきりと右側に示したような関係で表されることがわかる。これら①～⑤の漢字の接辞的用法は，品詞転換機能をもつというより，連体修飾における被修飾名詞と同じ役割を果しているともいえるだろう。特に「案」「券」「客」などのように自立性の高いものはそう考えたほうがよいと思われる。2. のＡＪＮの語基につくものも同様である。

したがって，1. の⑥の「率」のように自立性が低く，語基との関係が連体修飾の外に出るような場合[6]，そして，3. のようにいろいろな品詞の語基につく可能性があって，その意味もかなり形式的な場合，すなわち「性・度・面・用[7]」などを，純粋にＮ化機能をもつ接辞的用法として考えたい。これらの個々の漢字の接辞としての詳しい使われ方や造語の制約などに関しては別の機会に譲るが，品詞転換機能をもつ接辞的用法としては，以上のようにその漢字の自立性の低さといろいろな品詞の語基につくという２点を目安として考える。

さて，水野義道（1987）は，体言化機能をもつ接頭辞として「諸・全」をあげている。これらは「諸問題(N)」「諸困難(ＡＪＮ)」「諸注意(VN)」「諸事実(ADN)」などのようにＮ以外の語基について結合語を作り，その結果「諸困難な」「諸注意する」などが不可能になることから，体言化の機能をもつとされている。「全」も「全組織(N)」「全自由(ＡＪＮ)」「全調査(VN)」「全事実(ADN)」などとなる。この「諸・全」は前述の２点から考えても品詞転換機能をもつとみなせるだろう。「全」に意味的に似たものとして，「総工費(N)」「総出演(VN)」の「総」があるが，この場合には「総出演する」が可能なので，Ｎ化機能をもつとは考えない。

3.　VN化機能をもつ漢字「化」の接辞的用法

さまざまな品詞の語基について結合語がVNになる漢字を考えると，接頭辞には見あたらず，接尾辞にも「化」「視」のほかは例が少ない。

例. 孤立化・活発化・合理化・絶対化・映画化
　　VN　　AJN　　N'　　ADN　　N
　　絶望視・有力視・絶対視・疑問視
　　VN　　AJN　　ADN　　N

そして，「視」の造語力はあまり強くないので，ここでは「化」をVN化機能をもつ漢字の代表としてその使われ方や造語上の制約などについて考察していこうと思う。

「化」がつく語基としては，VN，AJN，ADN，N'，Nという5つの品詞が考えられるが，VNの語基にしかつかない場合は，品詞転換機能とはみなされない。したがって，VN化機能をもつ用法としては以下の1.～4.の4つの場合について考えることにする。ただし，2.のADNにつく用法は非常に例が少ない。また，例として三字漢語だけでなく，四字漢語やカタカナ語につくものまであげておいたのは，結合語の意味関係がはっきりみられることと，新造語が作られる可能性とその制約をみるためである。

結合の型	例	結合語の意味
1.　<AJN+●>：	複雑化・特殊化・軽量化	AJNニスル／ナルコト
	単純化・正常化・簡素化	
	強力化・自由化・平等化	
	深刻化・過疎化・多様化	
	明確化・緊密化・無力化	
	必要化・無限化・透明化	
	最適化・貧困化・鮮明化	
	ワイド化・パワフル化	
2.　<ADN+●>：	絶対化・実際化	

3. ＜N'＋●＞　：合理化・具体化・国際化　N'的ニスル／ナルコト
抽象化・普遍化・本格化
共産化・民主化・画一化
積極化・消極化・客観化
省力化

4. ＜N＋●＞　：①制度化・映画化・脚本化　Nニスル／ナルコト
私物化・市街化・理想化
規格化・構造化・都市化
義務化・長期化・習性化
立体化・平面化・理論化
現金化・高齢化・弱体化
日本語化・経済大国化
システム化・ドラマ化・マンネリ化
コード化・モデル化・カラー化
キャッシュ化・カード化

②近代化・男性化・女性化　NノヨウニNノヨウニ／N的ニスル／ナルコト
大衆化・一般化・表面化
人格化・儀式化・西欧化
特質化・意識化・幼児化
代名詞化・予備校化
イデオロギー化・ショー化・アメリカ化
ポーランド化・サラリーマン化

③能率化・効率化　Nヲ／ガヨクスル／ナルコト

上記の例をみると，「化」は主にＡＪＮ，N'，Ｎについて結合語をＶＮ化し，「～(ある状態) ニスル／ナルコト」という意味を表す。結合語の意味が他動詞的（～ニスルコト）になるか，自動詞的（～ニナルコト）になるか，という問題があるが，これは語基がもともと人為的にもたらされるのが普通のことか，あるいは自然発生的に起こりやすいことか，によって決まるといえよう。例えば，「制度化する」「映画化する」「合理化する」などは人の手を経ずに実

現することは不可能なものであり，他動詞的に使われる。自動詞的に使いたければ，「制度化される」「映画化される」ように受身で使うのが普通である。「自由化する」「平等化する」のように，もともと自由でない状態や平等でない状態を変えるという場合にも他動詞的に使われる。反対に，「弱体化する」「老朽化する」などは，好ましくないことが人の意志とは関わりなく起こってしまう場合が多いので，自動詞的に使われ，他動詞として使いたい時は，「弱体化させる」「老朽化させる」のように使役の形にする。しかし，それが人為的なことか自然発生的なことかが，文脈によって決まる場合も多い。例えば，「国際化する」「西欧化する」「民主化する」などは，その時の社会情勢や事情から自然発生的に起こる場合もありえるし，また人為的に操作可能な場合もある。

「化」の主な意味が「～（ある状態）ニスル／ナルコト」であることを考えれば，それがＡＤＮの語基につきにくいことは明らかであろう。ＡＪＮの語基につく例はかなりあるが，それでも無制限につけられるわけではない。初級日本語で出てくるＡＪＮを考えてみるだけでも，以下のようにつけられない場合がある。

*便利化・*不便化・*親切化・*元気化・*適当化・*残念化・*得意化
*無理化・*可能化・*有名化（ただし，「有名無実化」は可能）

これらの場合には，「便利にする／なる」「不便にする／なる」「親切にする／なる」などの形が使えるので問題はないわけである。

N'のように自立的でない語基に「化」がつく場合，「合理ニスル／ナルコト」「具体ニスル／ナルコト」などと言い替えられないのは当然であるが，Ｎの語基につく場合でも，4.の①のように「～ニスル／ナルコト」と言い普えられる場合ばかりでなく，②の「～的ニスル／ナルコト」のように，語基をＡＪＮ化した形でしか言い替られない場合もある。田窪（1986）のいっているように，「的」というＡＪＮ化機能をもつ漢字の接辞的用法の結合語には「化」をつけることができない，という語構成上の制約によるものかもしれない。Ｎの語基に「化」がつく例には，4.の③のように不規則な意味を表すものもある。

この「化」の造語力の大きさは，かたかなの語基につくことからもわかる。特にＮの語基につく例は，日本語の中でかなり定着した語彙になっており，今後も多くの新造語を生み出す原動力となりそうである。ＡＪＮの語基につく例は，まだ一般化しているとはいいがたいが，科学技術の分野やファッション，

スポーツ，マスコミ関係などの分野で特に新聞や雑誌記事の見出しなどで活躍しつつある。新しい例を多く集めることによって造語ルールが確立できそうである。

「化」のもつ意味を考える上で面白いのは，以下のようにVNにつく用法である。

＜VN＋●＞：	固定化・流動化・実用化	VNニ的　スル／ナルコト
	変動化・組織化・老朽化	VNスルヨウニ
	定着化・孤立化・鎮静化	
	硬直化・肥大化・顕在化	
	中立化・量産化・管理化	
	統一化・細分化・癒着化	

VNでも，「研究する」「相談する」「指摘する」「処理する」などの動作性のものには「化」はつきにくい。状態の変化を表すVNは，その結果の状態を語彙的意味の中に含んでいるので，「(結果の状態) ニスル／ナル」という意味を表すために「化」をつけることが可能である。ただ，もともとVNである語基にわざわざVN化機能をもつ漢字を接辞的につけるのであるから，そこに意味の違いがあるはずであろうと考えられる。例えば，「変動する」と「変動化する」の違いは，前者が「ある対象が変わる／動く」という，より直接的な自動的動作を表すのに対して，後者は「ある対象が変動的であるという性質をもつようにする／なる」という意味で，他動的動作をも表すことができるという点にある。また，「変動」と「変動化」のようなNの形での意味の違いを考えてみると，前者がより状態的，状況的であるのに対して，後者はその過程，変化を強調した表現になっているともいえよう。「固定する」と「固定化する」のように，前者が他動的動作を表し，「化」がついて自／他両用になる例もある。

4. おわりに

以上，品詞転換機能をもつ漢字の接辞的用法のうち，N化機能をもつものと「化」を代表とするVN化機能をもつものについて，まだ不十分ではあるが，考察してみた。N化機能をもつ漢字の接辞的用法については，個々の漢字に関して，もっと用例を集めて考察する必要があるし，さらに他の品詞転換機能を

もつ漢字の用法についても考察を続けていきたいと思う。また，結合語の意味を表す枠組みについてはまだ試案の段階であるが，漢字の接辞的用法を外国人学習者に説明するために有効な意味の記述方法を考えていく必要があると思っている。

注

（1）参考文献中の加納（1989）にある表(3)を参照。

（2）国立国語研究所報告48『電子計算機による新聞の語彙調査(IV)』

（3）三字漢語の中には，「雪月花」，「松竹梅」，「市町村」のように，それぞれの漢語語基が対等の資格で並んでいる＜○＋○＋○＞のような型もあり，また「重軽傷」，「祖父母」のように二字漢語が結合して重複部分が省略されたと見られる型（前者は＜○●＞＋＜□●＞→＜(○＋□)＋●＞，後者は＜●○＞＋＜●□＞→＜●＋(○＋□)＞）などもあるが，これらは対象から外れることになる。

（4）参考文献中の水野（1987）p. 64を参照。前稿で述べたように，水野は品詞を体言類，相言類，用言類，副言類，結合類の５つに分類する。

（5）産業界の「界」は「世界」，「印刷工」の「工」は「工員」，代表作の「作」は「作品」，音楽史の「史」は「歴史」の意味であり，それらの語の省略形という見方もあろうが，ここでは漢字一字の接辞的用法として扱う。

（6）①～⑤の場合には，結合語の意味を「●（手段）デ／ニＶＮスル」「●（所）デ／ニＶＮスル」「●（人）ガＶＮスル」「●（人／物）ヲＶＮスル」「●（物）ガＶＮシテイル」というような文で表した時，接辞的用法の漢字が文中に入っている。それに対して(6)の「成功率」の場合は，「ＶＮスル●」とはいえるが，「●ガＶＮスル」とか「●ヲＶＮスル」とかいう文の中に入れる形にはできない。

（7）水野（1974）は「用・式」などを相言化機能をもつ接辞としているが，「作業用な」「回転式な」という形が不可能であることから，本稿ではＮ化機能をもつ接辞的用法とする。

参考文献

相原林司（1986）：「不一 無一 非一 未一」『日本語学』Vol. 5 3月号，明治書院，pp. 67-72

荒川清秀（1986）：「一性 一式 一風」『日本語学』Vol. 5 3月号，明治書院，pp. 85-91

原由起子（1986）：「一的」Vol. 5 3月号，明治書院，pp. 73-80

加納千恵子（1989）：「漢字の接辞的用法に関する一考察 ―形容詞的意味をもつ漢字の接辞的用法について―」『文藝言語研究 言語篇』第16号，筑波大学，pp. 57―66

木村英樹（1986）：「一料 一代 一賃 一費(一金)」Vol. 5 3月号，明治書院，pp. 97―104

水野義道（1987）：「漢語系接辞の機能」『日本語学』Vol. 6 2月号，明治書院，pp. 60-69

中川正之（1986）：「一場 一所」Vol. 5 3月号，明治書院，pp. 105-108

野村雅昭（1974）：「三字漢語の構造」『電子計算機による国語研究 IV』国立国語研究所，pp. 37-62
————（1988）：「二字漢語の構造」『日本語学』，Vol. 7 5月号，明治書院，pp. 44-55
阪倉篤義（1966）：『語構成の研究』角川書店
杉本博文（1986）：「一者 一家」『日本語学』Vol. 5 3月号，明治書院，pp. 92-96
田窪行則（1986）：「一化」『日本語学』Vol. 5 3月号，明治書院，pp. 81-84
吉村弓子（1987）：「漢字の読み分けにあらわれる統語機能」『日本語学』Vol. 6 8月号，明治書院，pp. 104-112